

女優

宮本信子さん

今回のインタビューは、映画、テレビ、舞台と活躍されている宮本信子さんです。

宮本さんは、伊丹十三氏のことを「伊丹さん」と呼び、今でも隣にるように話をされているのが印象的でした。宮本さんは現在、女優業のほかに2007年5月に開館した伊丹十三記念館の館長も務めています。明るく、精力的に仕事をされている宮本さんに、記念館のこと、ご自身の近況などについてお話をうかがいました。

(聞き手・構成：石原 修)



——5月15日に、伊丹十三記念館が一周年を迎えられますね。記念館を作られた経緯を教えてくださいませんか。

2004年の夏に決めました。その日は伊丹さんの父親、映画監督であった伊丹万作と親交の深かった俳人中村草田男さんのお嬢様中村弓子先生のお宅に伺う日でした。万作さんと草田男さんは旧制中学の先輩、後輩で回覧雑誌「楽天」の仲間でした。「楽天」は一冊も残っていませんが、数年前「朱鷺」が発見され、私はどうしても拝見したかったのです。弓子先生とのお約束の時間より早く着いたので伊丹プロダクション社長の玉置さんと駅の近くで話をしました。「やっぱり記念館作りましょう。伊丹映画を伝えてゆきたい。二人とも年をとってからでは無理。今作ろう！」3秒くらい沈黙があり「よし、やりましょう！」二人で決意をしたのです。「朱鷺」は鳥肌が立つほど感動しました。弓子先生が「サプライズよ」とニコニコして1枚の絵を下さった。小学校1年生の時、伊丹さんが描いた茄子ときゅうりの絵です。伊

丹万作が草田男さんに自慢して、プレゼントしたものです。私、又、鳥肌が立ちました。大切なこの絵は記念館の最初の部屋に飾ってあります。この2月には、入館者数が4万人を超えました。

——どのような記念館にされたかったのでしょうか。

記念館は大勢の良い方と巡り合えたおかげで、本当に幸せなスタートとなりました。

記念館には、伊丹さんが自分で持っていたものもたくさん展示してあります。伊丹さんは、物を大事にとっていて、いろいろなものが整頓されて残してありました。どこに何があるかちゃんとわかっていたのです。私は、小さくても良いから、密度の濃い、あたたかくて伊丹さんらしいと感じられるような記念館にしたかったのです。ぜひ、伊丹さんがどういう人であるかを知っていただければと思います。まもなく一周年を迎えますが、イベントで何をしようか、考えています。

——宮本さんはこれまで一生懸命、たくさんのお仕事をされてこられましたね。

最初は文学座の研究所。新劇の舞台やテレビに出演して、それから結婚して子どもを育て復帰。映画、舞台、テレビの仕事をしてきました。歌とも巡り合い、ジャズを歌うようになり、舞台でもお芝居中心で歌のあるものをやりたくなりました。

——去年は、映画「眉山」に出演されましたね。

「お葬式」から「マルタイの女」まで計10本の伊丹映画に出演しましたが、伊丹さんが亡くなって、他の映画での出演が考えられないという時期が続きました。伊丹さんの映画製作のチームを伊丹組と呼んでいるのですが、伊丹組での13年間は、私にとって特別なものだったんです。今回、「眉山」の出演依頼を受けて、さだまささんの原作を読み、神田のお龍と呼ばれていた龍子の役を、ぜひやりたいなと思ったんです。振り返ってみると、映画出演は、10年ぶりでした。

——映画の公開後、すぐに舞台で「眉山」に出演されましたね。舞台でも、映画同様の広大なスケールが表現されており驚きました。

去年の5月12日に映画が公開されましたが、その年の12月には同じ龍子の役で舞台に出演しました。同じ作品がすぐに舞台化されることは珍しく、ましてや映画と舞台を同じ俳優で演じるのはそうそうないことだと思います。

——映画と舞台では、違いがありますか。

役の解釈は自分が作り出すので大丈夫なんですけど、映画を引きずりますと混乱します。脚本も違いますし、それに舞台と映画とは表現が違います。舞台は

生ですし、お客様がいらっしゃるんですもの。

台本が届くとまっさらな気持ちになって、カーッと入りこみます。台本を読み込むと、まずは自分の中で人物が動き出します。そして、粘土をこねるように役をふくらませて稽古に入り、今度は相手がいる中で、いろいろなことを試すことができます。「あーでもない、こーでもない」と。演出もされます。稽古で積みあげた一番良い芝居が決まってゆきます。初日を迎える時はいつもドキドキです。お客様にどう受け入れられるのか緊張します。反対に、映画やテレビは、現場でいきなり本番となりますから、別な緊張があります。

——舞台では、お客様の顔は見えているのですか。

見えてはいます。ポワーンと。「あ、知り合いがいるな」とは思いますがそれ以上はないです。集中したいから。

——これからどのような作品に出演されるのですか。

5月末から「王様とおばさん」という舞台に出演しますので、4月末から稽古に入ります。私たちの世代は、何をしてよいのかわからない、子どもを育て上げて、定年を迎え、喪失感にとらわれている方が非常に多いと思うんです。この作品では、そういうことがひとつのテーマになっています。ぜひ、同世代、そしてその上の世代の方々に観ていただけたらと思います。フラダンスや歌もある、トロピカルなお芝居です。フラダンスはこれから練習です。すごく楽しみです。

——歌でも活躍されていますね。

伊丹組が解散して、何か新しい挑戦をしなければと思っていたところに、1999年、小椋佳さんのトークと歌の番組「歌談の部屋」への出演を依頼され、

どういうふうに巡り合うかわからないので、待つのと同時に
巡り合ったときにすぐに良い仕事ができるように準備しなくては。
自分を信じて貫く、そして磨いていくしかないですね。

宮本信子

生のバンドでお客様の前で初めて歌いました。シャ
ンソンの「聞かせてよ、愛の歌を」と「夜明けの歌」
を歌ったんですが、それがすごく楽しかったんです。
その時のプロデューサーの方から「こんなに楽しく
歌をうたう人を久しぶりに見ました。ディナーショ
ーをやりませんか」と言われたんです。それから、
ライブを毎年行うようになりました。持ち歌のない
私に、小椋さんが「遅ればせの恋」という歌を記念
につくってくださいました。来年は3月、浜離宮朝日
ホールで10年目になるライブがあります。

—— JAZZ との出会いはいつだったのですか。

2000年に出演した舞台「あげまん」で、「アズ・
タイム・ゴーズ・バイ」を歌うことになりました。
そこで、この曲を歌ったいろいろな方のCDを聴いて
いて、女性ジャズシンガーのリー・ワイリーに出会
いました。なんて素敵なんだろう、すごくいいな、
詞を大事にしているな、こういう風に歌いたいなと
思いました。それがきっかけです。そしてすっかり
リー・ワイリーが好きになり、リー・ワイリーの故郷
オクラホマも訪ねました。

—— これからの抱負を教えてください。

これからも、自分の生き方を変えることはないと思
います。これまでと同じように、仕事もどうい
うふうに巡り合うかわからないので、待つのと同時に
巡り合ったときにすぐに良い仕事ができるように準

備しなくては。自分を信じて貫く、そして磨いてい
くしかないですね。そのためには身体も頭も追いつ
いていけるか。心配しても仕方がないので前を向い
ていこうと思っています。

—— 来年には裁判員裁判が始まります。宮本さんも選ば
れる可能性があります。

私も含めてまだまだ一般の人に制度が知られてい
ないと思います。法律用語など専門的な難しい言葉
をわかりやすくして、もっとピーアールしていただき
たいですね。

—— 最後に、弁護士に対して、一言お願いします。

私にとっての弁護士の先生方との関わりは信頼が
深く、とても濃いものです。幸せなことです。私の
立場になり、私の代わりに闘って下さる。守って下
さる。頼もしく、いつも感謝しております。

—— どうもありがとうございました。

プロフィール みやもと・のぶこ

北海道出身。1963年文学座付属演劇研究所、1964年劇団青
芸在籍時に別役実作『三日月の影』で初舞台。1969年に、映
画監督・商業デザイナー・エッセイストなどで活躍した伊丹十三
氏（1997年没）と結婚し、二児の母親となる。1988年「マ
ルサの女」ではシカゴ国際映画祭最優秀主演女優賞、日本アカデ
ミー賞最優秀主演女優賞、キネマ旬報報道主演女優賞、ほか多数
受賞。舞台・テレビにも活動の場を広げ、2000年からはJAZZ
LIVEの活動も行っている。